

Be Proactive to the Changes

まつもと かずこ
松本 和子

(メディアセンター本部事務長)



2018年11月に、メディアセンター本部事務長を拝命した。慶應は1970年の研究・情報センター発足以来、組織名に図書館を使っていない。先人は従来の図書館の一步先を行くという気概を組織名に求めたものと理解している。個人的にはメディアセンターというのが最良の命名かは疑問に思うところであるが、1990年の湘南藤沢キャンパス開設以来慶應の中では定着し、学生は図書館のことを「メディア」と呼んでいる。

図書館を取り巻く環境変化は、ITの進化だけでなく、社会の変化や政治、経済の国際化の波を受けてさらに複雑な様相を呈している。これらの変化にどのように対応し、課題を見据え、戦略を立てるべきなのだろうか。

中長期的な課題は、研究支援に関する事項が多い。電子ジャーナルの価格高騰問題は図書館単独では解決を見ることは難しく、近年海外では研究者や大学、助成団体を巻き込んだオープンアクセスに向けた動きが活発になっている。また日本では図書館が中心になって運営される機関リポジトリで紀要論文等のオープンアクセス化が進んでいるため、オープンデータ、オープンサイエンスへも図書館が何らかの役割を果たすことが期待されている。これらの課題解決のためには、図書館独自の努力、戦略に加えて、学内他部門や学外機関との連携も進めなくてはならない。

図書館経営では、全学的な財政基盤創出とその運用に関する課題がある。学術情報の電子化は、従来の各館別予算枠での選書やサービス提供を難しくし、全学で利用するコンテンツの契約や支払い業務は複雑化する一方である。2017年に研究担当理事、財務担当理事とメディアセンター所長を構成員とする「学術コンテンツ整備連絡会議」を立ち上げ、電子ジャーナル購読継続の有無の判断を委ねるとともに、継続のための財源確保について検討することに

なった。現在は間接経費を充当し主要電子ジャーナルパッケージ契約を維持しているが、実質的な共通予算の設立やそのための意思決定プロセス策定に着手できていない。「学術コンテンツ整備連絡会議」での議論を深めたい。

2019年9月に開始した早稲田大学との日本初の図書館システム共同運用は、目まぐるしく変化する環境下で、革新的なサービスを提供し続けるためには、世界標準に対応した最新システムの選択と大学を超えた協働が必須であるという共通認識があったからこそ実現したものである。さらに業務効率化とコスト削減により、新たなサービス提供の財源確保も目指しており、まず両校の目録部門を統合した「早慶目録ユニット」を立ち上げた。なおこのユニットは、従来の図書館目録およびこれから必要となるメタデータ作成に必要なノウハウの継承と専門性を維持したいという慶應側の強い希望で、慶應の中に設置することとなった。今後は早稲田大学との蔵書の共同保存を目指しShared Print等新たな協働も視野に入れている。

これからの図書館は、電子媒体をメインに提供し、インスタ映えする学生の知的好奇心を刺激するようなスペースデザインのある図書館が主流になっていくかもしれない。そうだとしても私たちの役割は、大学のミッションに従って、ユニークなコレクション、貴重書を含めた蔵書、電子的コンテンツを拡充し、利用者の情報アクセスを支援することに変わりはない。しかし一步先を行く、魅力的な図書館であり続けるためには、私たちは変化に対して常に能動的に行動しなくてはならない。前例や慣例に囚われることなく、想像力や創造力のあるスタッフを育成することが私に課せられた一番の課題かもしれない。